

【日本昔ばなし】牛若と弁慶

動画リンク: https://youtu.be/t0Lq8x_EXZ0

今回は日本の昔ばなし、「牛若と弁慶」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「牛若と弁慶」は、とても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「牛若と弁慶」のお話を始めます。

昔、源氏と平家が戦争をして、お互いに勝ったり負けたりしていた時のことでした。

源氏の大將義朝には、悪源太義平や頼朝のほかにも今若、乙若、牛若、という三人の子供がいました。

ちょうど一番小さい牛若が生まれたばかりのとき、源氏の戦況が悪くなりました。義朝は負けて、方々逃げ隠れているうちに、家来の長田忠致というものに命を奪われました。

平家の大將「清盛」は、源氏に仇を取られることを怖がって、義朝の子供を見つけ次第、倒そうとかけました。

義朝の奥方の常盤御前は、三人の子供を連れて、大和の国の片田舎に隠れていました。

清盛はいくら常磐を探しても見つからないものですから困って、常磐のお母さんの関屋というおばあさんを捕まえて、

「常磐のいるところを言え。言わないと殺してしまうぞ。」
と毎日ひどく責めました。

常磐はこのことを聞いて、
「お母さまを殺してはすまない。私が名乗って出ても、子供たちはまだ小さいから、頼んだら殺さずにおいてもらえるかもしれない。」

と、京都へ出かけました。

ちょうど冬のことで、雪がたいそう降っていました。

常磐は牛若を懐に入れて、乙若の手を引いて、雪の中を歩いて行きました。今若はそのあとからついて行きました。

さんざん苦労をして、清盛のいる京都の六波羅の屋敷に着くと、常磐は、
「お尋ねになっている常磐でございます。三人の子供を連れて出ました。」

私は殺されてもようございますから、母の命をお助けくださいまし。子供たちもこの通り小さなものばかりでございますから、命だけはどうぞお助けくださいまし。」
と申しました。

親子のいたいたしい様子を見ると、さすがの清盛も気の毒に思って、その願いを聞き入れてやりました。

それで今若と乙若とは命だけは助かって、お寺へやられました。

牛若はまだお乳を飲んでいたので、お母さんのそばにいることを許されましたが、これも七つになると鞍馬山のお寺へやられました。

そのうち牛若はだんだん物がわかってきました。

お父さんが平家のために滅ぼされたことを人から聞いて、悔しがって泣きました。

「毎日お経なんか読んで、坊さんになっても仕方がない。僕は剣術を稽古して、偉い大将になるのだ。」

「そして平家を滅ぼして、お父さまの仇を討つのだ。」
こう牛若は思って、急に剣術が習いたくなりました。

鞍馬山の奥に僧正ガ谷という谷があります。
松や杉が茂っていて、昼も日の光がささないような所でした。

牛若は一人で剣術をやってみようと思って、毎晩人が寝静まってから、お寺を抜け出して僧正ガ谷へ行きました。

そしてそこにたくさん並んでいる杉の木を平家の一門に見立てて、その中で一番大きな木に清盛という名をつけて、小さな木太刀でぽんぽん打ちました。

するとある晩のことでした。

牛若がいつものように僧正ガ谷へ出かけて剣術の稽古をしていますと、どこからか鼻の高い、見上げるような大男が、手に羽うちわを持って、ぬっと出て来ました。

そして黙って牛若のすることを見ていました。

牛若は不思議に思って、
「お前は誰だ。」
と言いますと、

その男は笑って、
「僕はこの僧正ガ谷に住む天狗だ。お前の剣術はまずくって見てもらえない。今夜から僕が教えてやろう。」
と言いました。

「それはありがとうございます。じゃあ、教えてください。」
と、牛若は木太刀を振って打ってかかりました。

天狗は軽く羽うちわであしらいました。

この時から天狗は毎晩牛若に剣術を教えてくださいました。牛若はずんずん剣術がうまくなりました。

するうち、牛若が毎晩遅く僧正ガ谷へ行って、怪しい者から剣術を教わっているということを和尚さんに告げ口したものがありませんでした。

和尚さんは驚いて、さっそく牛若を呼んで、髪を剃って坊さんにしようと思いました。

牛若は、
「いやです。」
と言いながら、いきなり小太刀に手をかけて、怖い顔をして和尚さんをにらめました。

その勢いにおそれて、髪を剃ることは止めました。

牛若はこうしているとまた、
「坊さんになれ。」
と言われるに違いないと思って、ある日ひそっと鞍馬山を下りて京都へ出ました。

牛若はもう十四、五になっていました。

そのころ京都の北の比叡山に、弁慶という強い坊さんがいました。

この弁慶は生まれる前お母さんのお腹に十八箇月もいたので、生まれるともう三つぐらいの子供の大きさがあって、

髪の毛がもじゃもじゃ生えて、大きな歯がによきんと出ていました。
そしてずんずん口をききました。

「ああ、明るい。」
はじめてお母さんのお腹から飛び出したとき、こう言っていきなりちょこちょこと歩き出したそうです。

お父さんは気味を悪がって、大きくなるとすぐ、お寺へやっしまいました。

お寺へやられても、生まれつきたいそう気の荒い上に、この上なく力が強いので、

少し気に入くないことがあると、ほかの坊さんをぶちました。

ぶたれて死んだ坊さんもありました。みんなは弁慶というと、震え上がって怖がっていました。

そのうちに比叡山の西塔の武蔵坊というお寺の坊さんが亡くなりますと、弁慶は勝手にそこに入りこんで、西塔の武蔵坊弁慶と名乗りました。

ある時弁慶は思いました。
「宝はなんでも千という数を揃えて持つものだそうだ。奥州の秀衡はいい馬を千疋と、鎧を千りょう揃えて持っている。」

「九州の松浦の太夫は弓を千丁、矢を千本揃えて持っている。僕も刀を千本揃えよう。都へ出て集めたら、千本くらい楽にできる。」

こう考えて、弁慶は黒糸おどしの鎧の上に墨染めの衣を着て、白い頭巾をかぶり、なぎなたを杖にして、毎晩五条の橋のたもとに立っていました。

そしてよさそうな刀を持った人が来ると、だしぬけに飛び出して行って奪い取ります。

逃げようとしたり、素直に渡さなかつたりするものは、なぎなたでなぎ倒しました。

すると、このごろは毎晩五条の橋に大坊主が出て、人の刀を取るという評判がぱっと高くなりました。

坊主ではない、天狗だというものもありました。そしてみんな怖がって、日が暮れると五条の橋を通る者がなくなりました。

ある時弁慶が持って来た刀を出して数えてみますと、ちょうど九百九十九本ありました。

弁慶は喜んで、
「うまい、うまい、もう一本で千本だぞ。おしまいが一番いい刀を取ってやりたいものだ。」
と独り言を言いました。

そしてその晩はわざわざ五条の天神さまにお参りをして、
「もう一本で千本になります。どうぞ一番いい刀をお授け下さい。」

と言って、それからいつものように、五条の橋の下へ行って立っていました。

牛若かは五条の橋の大泥棒の噂を聞いて、
「ふん、それは面白い。天狗でも鬼でも、そいつを負かして家来にしてやろう。」
と思いました。

月のいい夏の晩でした。牛若は腹巻をして、その上に白い直垂を着ました。

そして黄金づくりの刀をはいて、笛を吹きながら、五条の橋の方へ歩いて行きました。

橋の下に立っていた弁慶は、遠くの方から笛の音が聞こえて来ると、
「来たな。」
と思って、待っていました。

そのうち笛の音はだんだん近くなって、色の白い、きれいな稚児が歩いて来ました。

弁慶は、
「なんだ、子供か。」
とがっかりしましたが、そのはいている太刀に気がつくと、
「おや、これは、」
と思いました。

弁慶は橋の真ん中に飛び出して行って、牛若の行く道に立ちはだかりました。

牛若は笛を吹きやめて、
「じゃまだ。どかないか。」
と言いました。

弁慶は笑って、
「その太刀を渡せ。どいてやろう。」
と言いました。

牛若は心の中で、
「こいつが太刀どろぼうだな。よしよし、一つからかってやれ。」
と思いました。

「欲しけりゃ、やってもいいが、ただではやられないよ。」
牛若はこう言って、きっと弁慶の顔を見つめました。

弁慶はいら立って、
「どうしたらよこす。」
と怖い顔をしました。

「力づくで取ってみろ。」と牛若が言いました。

弁慶はまっ赤になって、
「なんだと。」
と言いながら、いきなりなぎなたで横なぐりに切りつけました。

すると牛若はどうに二三間後に飛びのいていました。
弁慶は少しおどろいて、また切っかかりました。

牛若はひょいと橋の欄干に飛び上がって、腰にさした扇を取って、弁慶の眉間をめがけて打ちつけました。

ふいを打たれて弁慶は面くらった勢いに、なぎなたを欄干に突き立てました。

牛若はその間にすばやく弁慶の後ろに下りてしまいました。

そして弁慶がなぎなたを抜こうとあせっている間に、後ろからどんとひどく突き飛ばしました。

弁慶はそのままとんとんと五六間飛んで行って、前へのめりました。

牛若はすぐとその上に馬乗りに乗って、
「どうだ、まいったか。」
と言いました。

弁慶は悔しがって、はね起こうとしましたが、重い石で押えられたようにちっとも動けないので、うんうんうなっていました。

牛若は背中の上で、
「どうだ、降参して僕の家来になるか。」
と言いました。

弁慶は閉口して、
「はい、降参します。御家来になります。」
と答えました。

「よしよし。」
と牛若は言って、弁慶を起こしてやりました。

弁慶は両手を地について、
「僕はこれまでずいぶん強いつもりでいましたが、あなたにはかないません。あなたはいったいどなたです。」
と言いました。

牛若はいばって、
「僕は牛若だ。」
と言いました。

弁慶は驚いて、
「じゃあ、源氏の若君ですね。」
と言いました。

「うん、佐馬頭義朝さまの末子だ。お前は誰だ。」

「どうりでただの人ではないと思いました。僕は武蔵坊弁慶というものです。あなたのようなりっぱな御主人を持てば、僕も本望です。」
と言いました。

これで牛若と弁慶は、主従のかたい約束をいたしました。

牛若は間もなく元服して、九郎義経と名乗りました。

そして兄の頼朝を助けて、平家を滅ぼしました。

弁慶は義経と一緒に度々戦いに出て手柄をあらわしました。

後に義経が頼朝と仲が悪くなって、奥州へ下った時も、常に義経のお供をして忠義を尽くしました。

そしておしまいには奥州の衣川というところで、義経のために討ち死にをしました。

その時体じゅうに矢を受けながら、じっと立って敵をにらみつけたまま死んでいたのが、弁慶の立ち往生だといって、みんな驚きました。

日本昔ばなし「牛若と弁慶」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

